

新撰小學讀本

卷四

檢定申請本



K120.8

59.1

4

目下部三之介編

# 新撰小學讀本

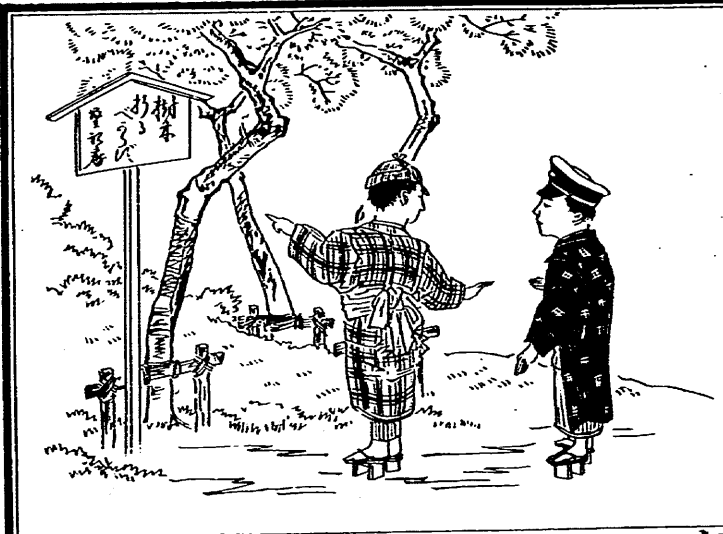
東京 田沼 癩 版

新撰小學讀本卷之四

國法にいたがへ

政府にては、人民の安全をまもり、幸福を  
すゝむるが爲めに、色々の規則をつくれ  
り。この規則を守るものを、良き人民とい  
ひ、守らざるものを、悪き人民といふ。  
今、幼きものゝ爲めに、常に心得おくべき





事がらを、次ぎに説き示さん。

人家に近き所にて、烟火を玩ぶべからず。

路上にて、犬をけいかくることなかれ。かべ、柱などに、落書

すべからず。

石、瓦を投げ、或は妄りに他人の地内に入るべからず。

公園などにて、樹木の枝を折り、或は堤にのぼりて、芝生を踏み荒すことあるれ。

電信のはりがねに、凧をかけ、或は榜示杭などを倒すべからず。

これ等は、とかく小兒の犯し易き事柄なれば、深くつゝしみまもりて、必ず惡しき人民といはるゝことなかれ。

### 拾ひ物は届け出でよ

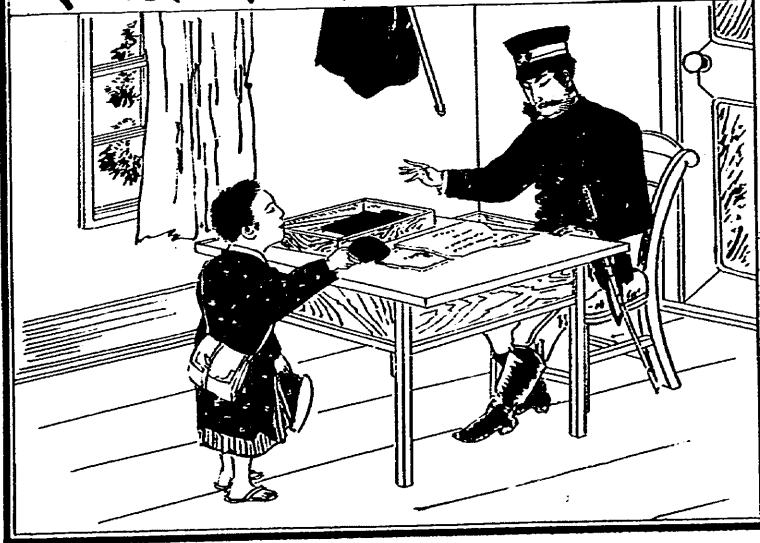
途に遺ちたるものあるときは、拾ひ取られてこれを警察署に届け出でよ。いかに僅かなる品物にても、決して私すべからず。

拾ひ物を私するは、取りも直さず他人のものを盗みたるに同ト。

これは、善太郎といふ生徒なり。今日學校に行く途中にて、錢を入れたる財布を拾ひたり。何人の遺したるものにや、さぞ迷惑に思ふならん。尋ねて渡さんとして、財布を開き見しに、五十錢の銀貨二個と、壹圓の紙幣三枚とあるのみにて、外に何も手

掛りとなるものあら  
されば詮方なくて、其  
の地の警察署に届け  
出でたり。

警部は善太郎のよく  
國法を守りて、私なく  
届け出でたる行を感  
じ、語をつくりて厚く



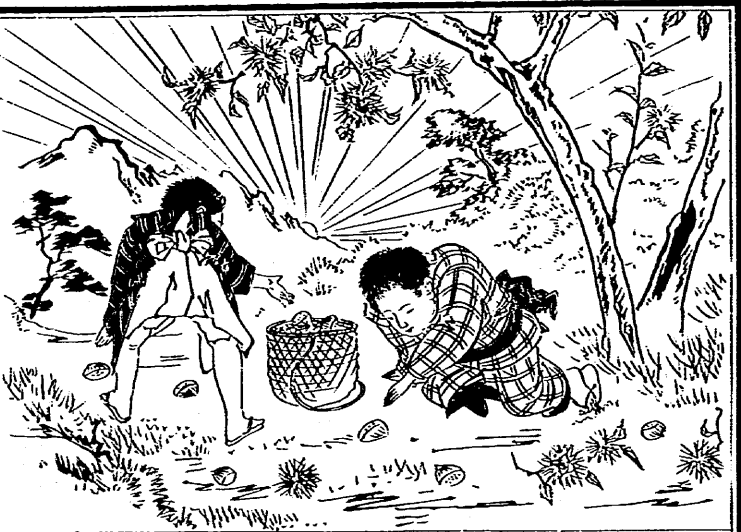
これを褒められたり。

されども、善太郎は、これが爲めに、思はず  
時間を費し、學校へ行くべき刻限の遅れ  
たるを氣遣ひに、警部は親切にも、一人  
の巡查をして學校に送り届け、且つ具さ  
にその次第を告げれば、教師も深く善  
太郎の殊勝なる志を嘉みして、その日大  
勢の生徒の前にて、この話を語り出でけ

れば、善太郎も身に、餘りたる面目を施しけるとぞ。

### 栗拾ひ

或日、西原民一は、一里ばかりへだとりたる、東山熊三の家へ、遊びに行きたり。熊三は、大に喜び、いろくのおもしき本を見せ、又、めづらしきくだ物をくれなどして、



互に、樂しみ居たり。頃は、十月にて、栗拾ひによき時なりしかば、熊三は、民一をさそひて、後の山へ、栗拾ひに行きたり。山には、至る處に、栗の落ちたるを二人にて、拾ひあつめ、

籠にみちたれば、二人は、やがてかへり來れり。

日は、早やくれんとす。民一は、家にかへらんとせしに、熊三、志きりに止めしかば、はがきにて、我が家にしらせ、其の夜は、つひに、熊三の家にとまりたり。

民一の父母は、はがきを見て、少しも、民一の事を忘んばいせざりき。汝等も、もゝ外

にてとまることあらば、民一の如く、父母の處へ、手紙を出さざるべからず。

### 祖父まごをいまむ

祖父、遠き國に行きし時、三人のまごに與へんとて、いろくのめづらき品物を買ひもとめ、我が家にかへり來れり。

祖父は、すぐにまごどもをよびよせて、



つばうをば、太郎に、弓をば二郎に、刀をば三郎に與へたり。  
 三郎は、此の時、年六歳なりしが、刀の外に、弓をももらはんといひ出でたり。  
 祖父は、之をとめて、

志づかにいふやう、三郎よ、さやうに慾深くするものにあらず、あまり慾深きは、汝のためによろしからず、我、今、汝に、慾深き犬の話を聞かせん。

祖父まごをいまむつづき

一足の慾深き犬あり。一きれの肉をくはへて、橋の上をわたらんとせし時、ふと、其





の下を見しに、水の中にも、一足の犬ありて、大なる肉をくはへ居るを見たり。慾深き犬は、其の肉をも得んと思ひ、吠え付かんとして、口を開けば、己がくはへたる肉

は、たちまち川の中に落ち、水の中の犬のくはへたる肉も、亦見えずなりぬ。水の中の犬は、橋の上ある犬のかげなり。慾深き犬は、己のかげなるを忘らずして、其の肉をもうばえんとせし故、己の肉までも失ひしなり。

三郎よ、あまり慾深くして、人の物までも得んとする時は、此の犬の如く、つひに、一

つも得ること能はざるに至るべしと、を  
しへたり。

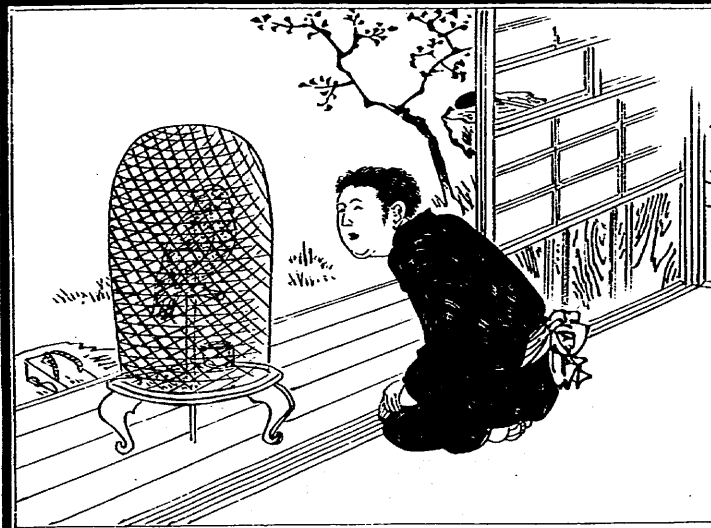
### あうむ

汝等は、あうむを見たりや。あうむは、其の  
大き鳥に同トく、其の羽毛、甚だ美しく  
して、よく、人の口まねをなす。人の外、もの  
いふものは、たゞ、此のあうむあるのみな

り。

栗山太郎の家に、一羽のあうむあり。其の  
名を、た玉といふ。太郎の父は、これに、父上  
母様、今日は、などの語を教へたり。

た玉は、つねに、我が家の男を見れば、父上  
とよび、女を見れば、母様とよび、外の人來  
りて、其の籠に近づけば、今日はといふ。  
太郎の父は、又、左様ですといふ語を、教へ



たり。或る日、た玉は、籠より出で、太郎のへやに來り、太郎を見て、父上とよびたり。太郎は、喜びた玉也、來たかといへば、左様ですと答へたり。

あらむつづき

た玉は、かはゆき鳥なり。されど、た玉には、悪しき癖あり。人の居らぬときは、机をつつき、障子をやぶりをどす。太郎の父は、これをきらひて、た玉を賣ることゝ定めたり。

或る日、栗山の家にて、た玉を買ふ人來れり。

太郎の父は、其の價を、十圓なりといひたり。一羽の鳥を、十圓とは、あまり高き價なり。

買ふ人は、あうむの籠のそばに行き、に、  
た玉は、今日はといひたり。買ふ人は、これにむかひて、汝は、十圓の價ありやといへば、左様ですと答へたり。其の人、これを聞きて、大に喜び、十圓出して、買ひ行きたり。

後に至り、其の人は、た玉の癖を見出して、大に悔い、た玉に向ひて、かゝるものに十圓出すとは、愚なることを忘たりといへば、た玉は、亦、左様ですと答へたり。

### 一日ノツトメ

朝ハ、早く起クベシ。起キ出デタラバ、カホト手トヲアラヒ、カミヲクシケヅリ、サテ

父母ニ一禮スベシ。

食事ヲヲハラバ、學校ニ行ク用意ヲナスベシ。其ノ日ノケイコニ、入用ノ品ハ、手落ちナク取りソ口ヘ、又、父母ニ一禮シテ家ヲ出ヅベシ。

學校ニテハ、ヨク、先生ノ言ヒツケヲ守リ、行ヒヲ正シクシテ、ヨクベンキヤウシ、學ビノ友ト、中ヨクスベシ。

學校ヨリカヘリ來ラバ、父母ニ一禮シ、其ノ日學ビシ處ヲ復習シ、サテ後ニ遊ブベシ。

寢ントスル時ハ、父母ニ一禮シテ後、トコニ入ルベシ。

チヅ、バツ、其ノ外、目上ノ人ニハ、父母ト同ジク一禮スベシ。

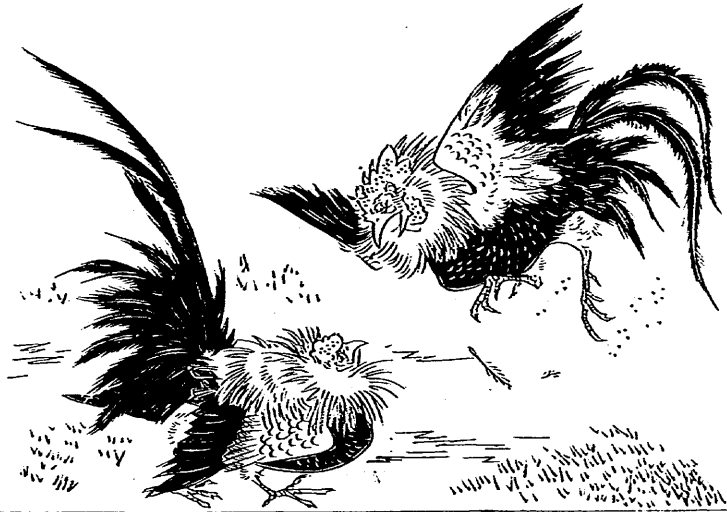
父母、其ノ外、目上ノ人ヨリ、ヨバル、事ア

ラバ、復習ノ時ニテモ、スグニ立ツベシ。

### 雞ノケアヒ

二羽ノ雞、庭ニテ、ケアヒヲナセリ。クチバ  
シニテツ、キ、足ニテケリ、互ニマケジト、  
一時間バカリケアヒシガ、一羽ハ、マケテ、  
逃ゲ出シタリ。

マケタル雞ハ、逃ゲテ、庭ノ隅ニカクレ居



タレド、勝チタル雞ハ、  
高キ塀ノ上ニ飛ビ上  
リ、羽バタキシテ、勝チ  
ドキヲ、高クアゲタリ、  
時ニ、イツクヨリカ、一  
羽ノ驚飛ビ來リテ、塀  
ノ上ナル雞ヲツカミ  
去レリ。此ノ雞、勝チタ

ルヲホコラズバ、カ、ルコトハナカリシ  
モノヲカウマンハ、身ヲホロボスノモト  
斗トハ、カ、ルコトヲ、イヒシナラン。

### 徳川竹千代

徳川家康、幼名を竹千代といふ。五六歳の  
時、僕に托はれて、遊びに出でしに、川ばた  
に、多くの小兒あつまりて、軍遊びをなし

居るを見たり。

三百人ばかりの小兒、二手にわかれ、一手  
は、二百人、一手は、百人ばかりなりしが、二  
百人の方、勢つよく見ゆしが、見物人は、  
皆、其の方のみかたとなれり竹千代は、暫  
くこれを見てありしが、脊中より、聲かけ  
て、すくなき方に、みかたせよと、言ひつけ  
たり。



僕あやーみて、其の故  
 を問へば、多き方は、多  
 きをたのみて、心一致  
 せず、少き方は、心一ち  
 して見ゆれば、少き方  
 勝つべし。  
 又、たとひ、まくるも、弱  
 き方をたすくるは、男

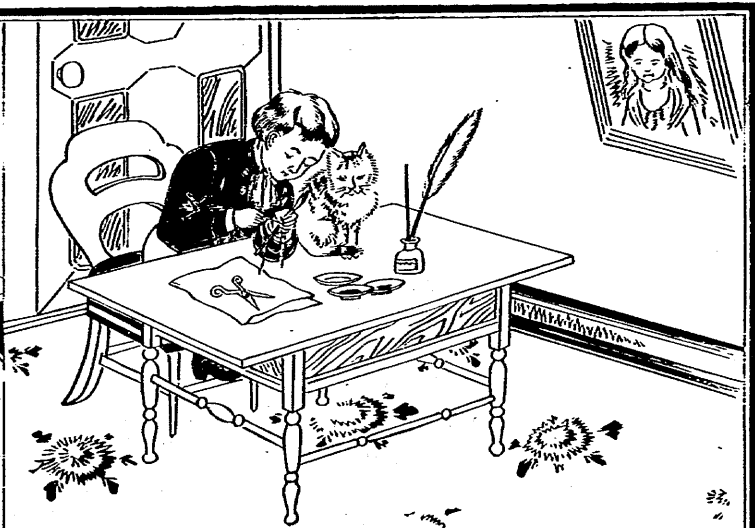
の志わざなり、いざ行け、いざ行けと、いさ  
 みたてば、僕は、其の智と、其の勇とにかん  
 づて、言はるゝまゝに、少き方に行きたり  
 とぞ。

### 小兒のゑかき

アメリカの國に、ウエストといふ人あり。  
 天性、ゑをかきことを好み、七歳の時、赤子



のねたるかはをうつし、よくにせて、村中の人に、ほめられたり。  
 ウエストの村は、遠きるふかにて、其の村には、色どりするに入用のものをかり、  
 が、ウエストの母は、やうやう、さがしもとめて、赤、黄、青の三色を、ウエストに與へたり。ウエストは、喜びて、これを用ひんとせしも、其の用ひ方を知らざりき。



アメリカにては、字は、かねの筆にてかくことゑるが、色どりをするは、けものの毛にてつくりたる人あり。  
 ウエストは、これを聞きて、家のかひ猫の毛をはさみ切り、それに

て筆をつくりたりしが、毛、柔かにすぎて、  
用をなさざりき。これ、ウエストが、八歳の  
時なりき。

後、みやこにある人より、色どりに用ふる  
筆を送りくれたまは、ウエストは、大に喜  
び、ますます、急をならひたりしが、後に、名高  
き急かきとなりたり。

### 急のぐ

橋口定一は、急をかくことを好めり。或る  
日、母は、定一に、急のぐ一箱と、朶もちや一  
箱とを與へたり。急のぐは、赤、青、黄の三色  
あり。朶もちや箱には、紙にてつくりたる  
菊の枝二三本と、ききやうの枝と、だいく  
とありたり。

定一は、大に喜び我がへやにかへりて、先づ、赤の糸のぐにて、菊の花を染めたり。次に、黄の糸のぐよて、別の菊の花を染めたり。

定一は、其の葉を染めんとせしも、葉は、緑色にして、のこりの糸のぐは、青のみなれば、いかゞせんとしきりに考へ居たり。定一は、つひに、考へつかざりしかを、母に



問ひし、母は、二色を合せなば、別に一色を生ずべしと、教へたり。定一は、先づ、赤と青とを合せしに、ききやうの花を染むるによろしき、紫の色を生じたり。定一は、こよよて、き

きやうの花を染めたりけり。

急のぐつづき

定一は、又、青と黄とを合せたるに、緑色となりたり。緑色は、何を染むるよよろしきか。定一は、こまを以て、何を染めんと思ふ。試みに、これを考へ見よ。

定一の次、赤と黄とを合せたり。其ので

きたるものは、赤ふ阿らず、黄よもあらむ。別、橙の色をかしたるものにて、橙色といふものなり。此の色は、定一の持てる木もちやの中、何を染むるに、よるしき。定一は、こまを以て、何を染めんと思ふ。試みよ、これを考へ見よ。定一は、緑色にて、菊の葉を染め、橙色にて、橙を染めたり。汝等、定一のなり、とよしとする。あしと



するあ。  
 定一も、こまを以て、い  
 とうれーげよ、母の前  
 ふ至り、母の教へをこ  
 へり。母も、定一のな  
 たるをはめて、さてい  
 ふやう、未だ、青にて染  
 めたるものを見ず、こ

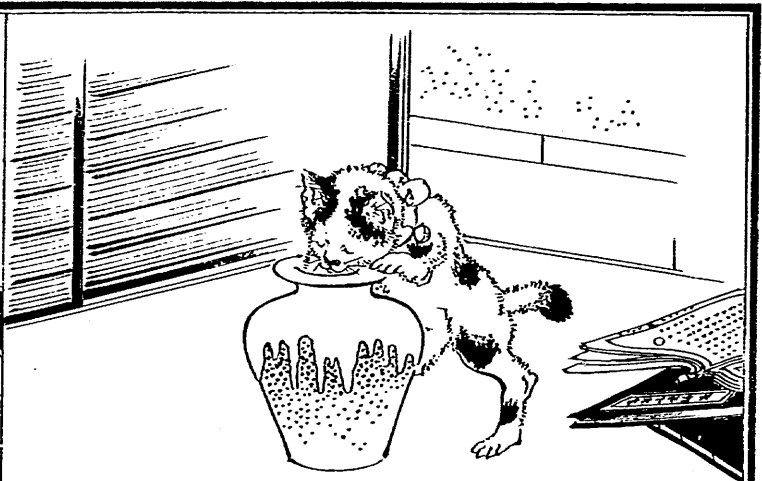
こよ人形あり、此の衣服を、青よて染むべ  
 ーとて、又、そまを、定一よ與へたり。

猫

北山一郎ノ家ニ、一足ノ猫アリ。其ノ名ヲ、  
 ブチトイフ。ブチハ、大ナル目ト、スルドキ  
 爪トヲ持テリ。サレド、ブチハ、カシコキ猫  
 ナレバ、一郎ハ、甚ダ、コレヲ愛セリ。一郎、ブ

チヲ抱ク時ハ、彼ハ目ヲヤサシクシ、爪ヲ、  
指ノ間ニチヅメテ、決シテ、一郎ヲキズツ  
ケタルコトナシ。

ブチハ、ネズミヲ捕ルコトヲ好メリ。或ル  
日、ブチハ、庭ノ方ヨリ、一疋ノネズミヲク  
ハヘテ、一郎ノヘヤニ來リ、フリ上ゲテハ  
ハナチ、ハナチテハフリ上ゲ、又、ネズミ、モ  
シニゲントスレバ、スグニ捕ヘナドシテ、



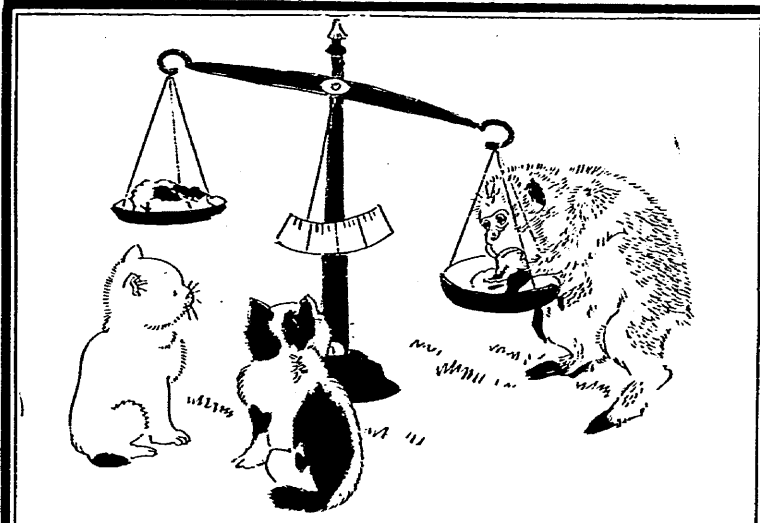
ウレシサウニ、タハム  
レ居タリ。  
ブチハ、又、フリ上ゲシ  
時、アヤマチテ、ネズミ  
ヲ、ツボノ中ニナゲ入  
レタリ。  
ブチハ、捕ヘントシテ、  
ツボノ中ニ、手ヲ入ル

レドモ、トミカザリキ。ブチハ、又ツボノ中  
ニ手ヲ入レ試ミタレド、トミカザリシカ  
バ、暫ク考フルヤ、ウスナリシガ、ヤガテ、ツ  
ボヲ倒シ、ニ、ネズミハ、ツボノ外ニ出デ  
ケレバ、再ビ捕ヘテ、庭ノ方ニ持チ去レリ。

### 猿ノ裁判

慾深キ、二足ノ猫アリ。或ル日、一切レノ牛

肉ヲ得テ、二切レニワケシニ、一切レハ、少  
シフトカリシカバ、二足ニテ、コレヲ争ヒ、  
ハテハ、二足ニテ、嚙ミアヒヲ始メタリ。  
其ノ時、此處ヲトホリカ、リシ、一足ノ猿  
アリ。我、ヨキヤウニ、裁判シテヤラントテ、  
ハカリヲ持チ來リ、二切レノ肉ヲハカリ、  
ナルホド、一切レハ重シトテ、其ノ方ヲ、一  
口食ヒテ、又、ハカリニカケタリ。



此度ハ、先ニ輕カリシ  
 方、重クナリシカバ、猿  
 ハ、又、コレヲモ、一口食  
 ヒタリ。二足ノ猫ハ、コ  
 レヲ見テ、カクテハ、肉  
 ハ、ダンクニヘラント  
 テ、カヘシタマヘトイ  
 ヒ出デタリ。

猿ハ、イフヤ、ウ、二切レトモニ、同ジ重サニ  
 ナルマデハ、カヘスコトナラズトテ、ハカ  
 リテハ、重キ方ヲ、一口食ヒ、又、ハカリテハ、  
 一口食ヒシカバ、二切レトモニ、ミナ、猿ニ  
 食ヒツクサレ、慾深キ猫ハ、一口モ食ハズ  
 シテ、牛肉ハナクナリタリ。

一月一日



今日は、一月一日なり。風ただやかにして、  
 そら晴きわたり、家々ののきばにも、日の  
 丸の旗ひるがへり、門には、松うざり立て  
 り。  
 東より西より、行きちがふは、年の始めを  
 祝ふ人あるべし。はかまをつけたるあり、  
 洋服をきたるあり。みな、喜ばしげなる顔  
 をなせり。



あまたの男兒も、女兒  
 も、美しき衣服をつけ、  
 はねをつき、凧をあげ  
 などして、思ひくに、樂  
 しみ居まり。心せよ、か  
 しこき學びの人々。此  
 の樂しき一月一日は、  
 我等が、新しき一つの

年を加ふる日なり。されば、今年ハ、去年よりも、一―は、行ひを正―く―、一―は、學問をつとめざるべからず。

### 一月一日の唱歌

年のはじめの、ため―とて、をはりなき世の、めでたさを、松竹立て、門ごとに、祝ふ今日こそ、樂―けし。

はつ日の光り、あきらけく、をさまる御代の、けさのそら、君がみかけに、くらべつゝ、あふぎ見るこそ、たふとけれ。

### 雪人形

天寒く雪降りて、野も山も、雪にて、白く包まれ、木々の枝に積り―雪は、白き花の咲

きたる如くにて、四方のけしき實に美し。あまたの小兒も寒さをもいとはず、打あつまり、雪人形をつくりて遊べり。雪人形は、高さ六尺もあるべし。石をはめて、目と鼻、木の小枝をさして、ひげとなせり。一人の小兒は、ひしやくにて、雪人形に水を注ぎ居まり。これは、何の爲めなりや。水は、寒き風より吹りれてこほり、雪人形を堅



固になすの故なり。此の人形を、いかなる人と思ふら、腰少しかがみ、手に杖を持ちたるを見れば、老人なるべし。小兒等は、手を吹くもあり、手をふところにも

せるもあり、暫し、雪人形をぶがめてあり  
しが、からだを温めばやとて、御老人左様  
ならといひつゝ、我が家さして、かへり行  
きたり。

### 龜田窮樂の孝行

龜田窮樂は、早く、父を失ひ、母と二人ふて  
住みけるが、母は、年老い、物わすれする病

にかゝれり。

窮樂の家は、河流に沿ひたり。或る日、客人  
ありて、窮樂と物がたりしてありしに、大  
雨降りて、川の水まゝ、水の音、高く聞えた  
り。

母は、窮樂をよびて、あの音は何ぞと問ふ。  
窮樂は、甚だうやくうやくして、あれは、川水  
の音なりと答ふ。母、うなづきしかば、窮樂



は、禮して去れり。  
 暫くして、母は、又、窮樂  
 をよびて、あの音は何  
 ぞと問ふ。窮樂は、甚だ  
 うやくして、答ふるこ  
 と、始めの如し。  
 かゝること、三四度  
 になりしうを、客人あや

しみて、其の故を問ひしに、窮樂、涙を流し、  
 母は、病にかゝり、物わすきまること、あ  
 とほりなり。故よ、我もまた始めて問はれ  
 たる心にて、答ふるなりといへり。  
 客人後に、此の事を、人にかたりて、窮樂の  
 行ひは、やすきに似て、實はかたし、孝行の  
 志深きものにあらざれば、なしかたきこ  
 となりと、甚だかんしんしたりきとぞ。

# 孝行の歌

山より 高き 父の 恩、  
 海より 深き 母の 恩、  
 海と 山とは 限り あり、  
 たやの 御恩は 限り なし、  
 いかで 報いむ 其の恩を、  
 いかで 報いむ 其の恩を。

十月の 間 腹ごもり、  
 三四五年の はぐみみの、  
 其の苦みは 母ならで、  
 誰かは 堪へむ 母ならで、  
 いかで 報いむ 其の恩を、  
 いかで 報いむ 其の恩を。  
 はへば 立ちてよ 歩みてよ、

六とせの 春より 學問の、  
 道に 入りしも みな 父の、  
 厚き めぐみと 知れよかし、  
 いかで 報いむ 其の恩を、  
 いかで 報いむ 其の恩を。

新撰小學讀本卷之四終

全 明治二十六年十一月六日印刷  
 年 十一月九日發行

定價金七錢五分



編輯者  
 發行兼印刷者  
 發兌元  
 發  
 賣  
 所

東京市神田區三橋通町廿壹番地

日下部三之助

東京市京橋區八官町七番地

田沼太右衛門

東京市京橋區八官町七番地

田沼書店

神奈川県横濱市尾上町三丁目

田沼書店

埼玉県北葛飾郡杉戸町

田沼支店

